

才を見極める ―教育哲学の観点から

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ京大の知」(朝日新聞社後援)のシリーズ10「教育を考える」。3月6日に第4回の講演があり、「才を見極める 教育哲学の観点から」と題して、鈴木晶子(しょうこ)・教育学研究科教授が、「才」とは何か、五感の中でも特殊な「触覚」の重要性などについて語った。

●磨けば死ぬまで豊かになる



講演する鈴木晶子教授。自分の心の変化を見るため、1日新書1冊の速読と1週間で1ページの遅読を両方行い、気になる言葉を書き出す作業を勧める

鈴木晶子教授は、ドイツの研究者と共同研究をすることが多い。来日した彼らには、日本人が春のお花見や秋の紅葉狩りなどに興じている姿が印象深いらしい。

ベルリンの大学教授は「日本人はどうしてこんなに自然を身近に感じているんだ？ トイレの洗面台に一輪挿しが飾ってあるようなことは、ドイツではない」と驚いたという。

そんなエピソードを引きながら、鈴木教授はこう話を続けた。

「私がこれからお話する『才』も、愛(め)でないと伸びていかないものです。つまり、『才』も生き物だというのが、私のメッセージです」

愛でることは手入れをすること。「肌や草木のように毎日気にかけて磨けば、才というものは、死ぬまで豊かになる可能性があります」

では、「才」とは何だろう？

鈴木教授はスライドを示した。中央に楕円(だえん)で囲んだ「才」の字があり、そこからいくつかの才を使った熟語が線で結ばれている。天才、英才、秀才、才智、才覚、才能……。

「才」はさまざまな言葉と組み合わせられる。「その人間の器や力量であり、活躍の成果であると同時に、活躍をするであろう潜在的な力を暗示するもの。私たちは、そんなふうにか才という言葉を使っています」

「和魂洋才」という言葉がある。明治時代、日本は、和の精神を持ちながら西洋の技術や科学を摂取しようとした。

「古代にも『和魂漢才』という言葉がありました。平安時代の文献にも登場しています」と鈴木教授。むろん「漢」は中国を指す。鈴木教授は、「魂」と「才」をいかに結合していくかが大切だったと解説し、「才を用いる人間の人格を高めるために、魂をセットで考えることが多かった」と語った。

●タクトと呼ばれている智恵

こうした発想はヨーロッパにもあったという。

ラテン語では「才」のことを「ingenium」と言う。そこにはふたつの意味が含まれている。「genie(天才)」と「witz(機知)」だ。前者はさらに、エンジニアという言葉につながる。後者は、ユーモア・エスプリという言葉につながる。

鈴木教授によれば、東洋でも西洋でも、「才」と「魂」をつなぐのは「智恵」だ。鈴木教授は「知恵」ではなく「智恵」と示した。

「今日は、タクトと呼ばれている智恵をご紹介します」

タクトと言われると、一般には指揮棒を思い浮かべる。だが、「タクトはもともと西洋では、コミュニティー、人間関係の智恵です。英語で『あの人はタクトがある』というと、『分別があって、相手の心を傷つけない配慮がある』という意味です」と鈴木教授。

●右手が触るのか左手が触るのか

タクトの語源には「触覚」という意味もある。

「みなさん、右手と左手を重ね合わせてみていただけますか」

鈴木教授が会場に呼びかけた。「目を閉じて、右手に意識を集中してください。右手が左手を触っていると思って、その触れる、触れられる感触を確認してみてください」

次に、手を離して再び重ね合わせ、今度は左手に意識を集中するように呼びかける。「自分の意識があるほうが触る側です。触られていると思ったときに触られている手が決まります。これが、触覚という感覚の特殊なところです」

同じ五感でも、視覚や聴覚は、「私」という主観(主体)が何かを感じ取る。触覚は、触れているのか触れられているのかがわからない。同時に両方が成立しているとも言える。人間中心の認知がなかなか難しい感覚なのである。



意外性のある組み合わせの話に熱心に耳を傾ける聴衆たち

明治から昭和にかけての哲学者で「京都学派」を形成した西田幾多郎は、著書「善の研究」で、ピアニストの例を挙げて、こんなことを述べている。

「ピアニストが夢中になってピアノを弾いているときには、自分が弾いているのか、何者かが私をして奏でさせているのかがわからない」

こうした状態を西田は「主客未分」「純粹経験」と呼んだが、「触覚」と似ている。

鈴木教授はもうひとつ、仏師の聞き取り調査の例を挙げた。「仏師は、彫るのではなく、『木の中におわす仏様が目に見える形でお出ましになるのを準備している』という感覚だそうです。これも純粹経験につながっていると思います。『木の声が聞けるかどうか』が大事なんだ」という言葉が印象に残りました」

自分が世界に対して働きかけているのか、世界が自分のほうにやってきているのか——。

● 熟練した踊り手ほど動きが小さい

鈴木教授は数年前、運動生理学の研究者らと共同研究したなかで、例えばハワイのフラダンスの調査では、モーションキャプチャーを用いて、踊りをコンピューターで解析したところ、初心者ほど動きが大きいことがわかった。熟練した踊り手は、非常に細かく、少ししか動いていない。それにもかかわらず、踊りの深さが感動を与える。

「このように、形で現れるものの奥にある動きをどのように身につけていくか。学校教育の中では、こうした技を学ぶ機会が失われてきています。しかし、技の修練の中で質の高い芸術作品が生まれるように、『才』を磨く技法は『美』と関係しています」

そこで、鈴木教授は、美しいものに出合う体験を中心にした学習のあり方を、芸術活動や食育の分野でプログラムしている。たとえば京都市の小学校では食育として、来校した日本料理の達人がつくる本物の味に触れる。しかも、京焼きの器に盛りつけるなど、美とも結びつける。食べることを通して、美しいものと出合い世界とつながる試みだ。

● 才を見極める三つの観点

鈴木教授は最後に、才を見極める観点を三つ挙げた。

- (1) 才は場を得て花開く
- (2) 才は人格の衣を着て発現する
- (3) 才は愛でてこそ伸びる



才を見極める三観点を強調する鈴木教授

才がいくらあっても、生かす場がなければ芽が出ない。適材適所だ

才は、人間のパフォーマンスや行動の形でしか見えない。葉が揺れるさまを見て、風の存在を知ることができるように。

そして強調したのが、3番目の「愛でてこそ」だ。

長所を褒めれば、人はもっと伸びていく。しかし標準モデルを設定すると、どうしても足りない部分に目が行き、引き算の発想で人を評価してしまう。

「日本人は、才を愛でることが非常に希薄になっています。学校教育の現場でも、企業でもそうです。まずその人の能力で素晴らしいと思うことを言葉にすることから始めましょう。すると、何ができないかではなく、何ができるかが見えてきます」

人間が大きな体験などを経て成長すれば、周囲も「あいつは一皮むけたな」とわかる。人間は昔から、才を見極める才能を持っていたはずだ。

「先の三つのセットでご自身の才を磨かれると、みなさんもおそらく、何かが変わった瞬間に出合えると思います」

鈴木教授はこう結んだ。